

POINT 1 社会とのつながりを意識した題材構成

生徒たちが、社会と美術とのつながりを実感できるような作品を選び、題材を構成しました。

環境問題をテーマに制作する作家を大きく掲載

環境問題やサステナビリティをテーマにした作品を制作しているアーティスト、オラファー・エリアソンを巻頭で大きく取り上げました。

P.4～5「作家の手法 オラファー・エリアソン」

編集部
ここがこだわり！

国際的に高い評価を得ているオラファー・エリアソン。2020年夏には東京都現代美術館で大規模な個展が開催されました。彼の代表作やアイデアスケッチを掲載しています。

作家の手法 アーティスト オラファー・エリアソン

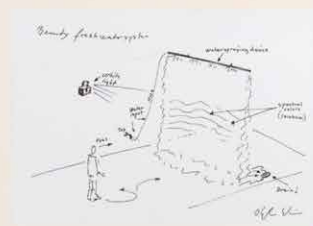
「体験そのものが作品の本質」

私の作品で重要なのは、体験することです。例えば「アイス・ウォッチ」(P.5)という作品では、氷河から氷を選び、街中に展示しました。氷が溶けることは、知識として誰でも知っています。しかし、実際に氷に触れた人たちは「冷たい」と驚きます。つまり、頭で知っていることと、体験から得られるものは全く異なっていて、氷に触れたとき、その二つが結び付くのです。

私が今関心をもっているのは、どうすれば私たち一人一人が「地球の気候変動とつながっている」という実感をもつことができるかということです。頭の中で知っているだけでは、行動に結び付きません。身体的な関与から得られた実感こそが一人一人の行動につながると信じて、作品を制作しています。

「ビューティー」について

「ビューティー」(P.2～3)は天井から、霧状の水をカーテンのように降らせ、そこにスポットライトで光を当てた作品だ。制作のためのスケッチなどを見てみよう。



「ビューティー」のためのスケッチ 1993年
スポットライト、鑑賞者、水のカーテンの位置や、作品の仕組みなどが記されている。

スタジオ内に機材を設置し、虹の見え方を確かめている様子。「ビューティー」で使ったスポットライトは一つだけだったが、ここではより規模の大きな「レインボー・アセンブリー」のために、スポットライトを複数使った試行を行っている。



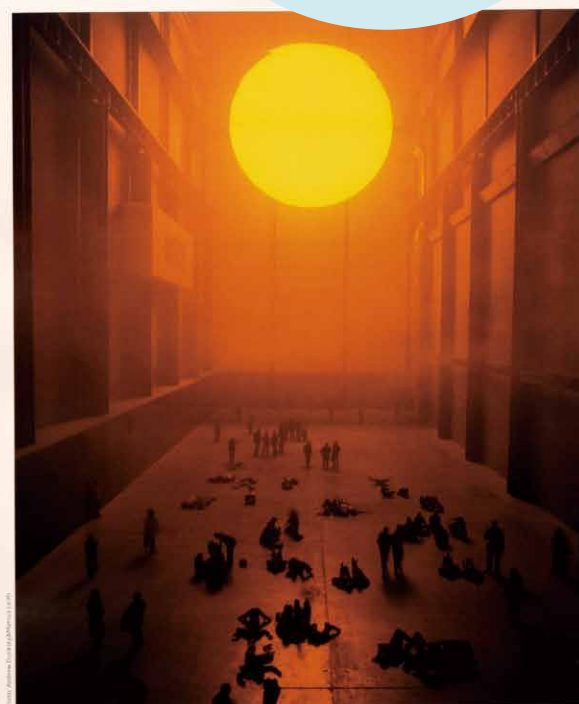
スタジオでの制作

エリアソンは職人や建築家、美術家、デザイナーなど、さまざまな専門家と共同で「スタジオ・オラファー・エリアソン」として作品を制作している。スタジオには合計120名以上が所属し、さまざまな作品を同時進行で制作している。



左：黒い板に色とりどりのガラス球を付けた「エア・アンブレラ」の制作風景。
右：ライトを制作するワークショップ「グリーンランド・プロジェクト」のための準備の様子。

Photo: Maja Madsen, Photo: Maja Madsen, Photo: Maja Madsen



ウェザー・プロジェクト
約200個のライト、霧発生機、鏡、アルミニウム他
2003年 テート・モダン（イギリス）での展示
室内に太陽を出現させたかのような作品。天井全体に鏡を貼り、人工の霧を発生させることで、独特な空間を生み出した。半円形の巨大なスクリーンを天井の鏡に映して円形に見せ、裏から強力なライトを点灯して、太陽のような光をつくり出している。



スクリーンを真下から見た様子。光る二つの円のうちの左がスクリーン、右がライト。鏡面になった天井には鑑賞者の姿が映り込んでいる。



天井が鏡面になっているため、多くの人が床に寝そべて鑑賞した。

アイス・ウォッチ 氷河の氷 2015年
バンテオン広場（フランス）での展示
地質学者と共同で制作した作品。グリーンランドの氷河から解けた氷の塊を海から引き揚げ、街中に展示した。地球温暖化による影響を、鑑賞者に体感させることを意図している。フランスで行われた、気候変動についての国際会議に合わせて制作された。



鑑賞者は自由に氷に触り、氷の溶けたさや様々な溶けていく様子を感じることができる。



Photo: Maja Madsen, Photo: Maja Madsen, Photo: Maja Madsen

制作過程やスタジオの様子を詳しく紹介

巻頭に掲載した「ビューティー」(P.2～3)のアイデアスケッチや、スタジオでの制作風景を紹介しています。

環境問題について考えさせる作品を掲載

地球温暖化による影響を鑑賞者に体感させることを意図した作品「アイス・ウォッチ」を掲載しています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGsに関連した作例を多数掲載

生徒たちがSDGsについて考えられるような作例を数多く掲載しています。



使い捨てのプラスチック製品を削減するためにデザインされた、自然素材でできた機内食の食器を紹介しています。
「飛行機の機内食のための食器セットとその原材料」(P.38)



デザインエンジニアの山中俊治
による、陸上競技用義足を制作過程とともに掲載しました。
「Rami ver1.0」(P.40～41)

防災についての情報をまとめた「東京防災」を掲載。災害時の対応などをわかりやすく伝えるための工夫を紹介しています。
「東京防災」(P.39)



援助や配慮が必要な人が、援助を得やすくなるようにつくられた「ヘルプマーク」。作者の言葉やアイデアスケッチとともに紹介しています。
「ヘルプマーク」(P.38)

他にもSDGsに関連した作品を掲載！

運命の門(P.24)、ジョルジュ・ルース アートプロジェクト in 宮城(P.32)、TAKAO 599 MUSEUM(P.35)、避難所用 紙の間仕切りシステム(P.39)、チャリーチェア(P.43)、バルミラの住宅(P.45)、Tree-ness House(P.45)、Great (Bamboo) Wall(P.46)、Jeju Ball(P.47)、高柳町 陽の楽家(P.47)